

青年期のための「親になること」を通した 次世代教育プログラムの検討

後藤 さゆり 平岡 さつき 呉 宣児

大森 昭生 奥田 雄一郎 前田 由美子

はじめに

本研究では、現代における「親になること」の意味や価値を形成している要因を多角的に浮かび上がらせ、「親になること」の今日的意義について検討を重ねてきた。具体的には、質問紙調査では、大学生にとっての「親になること」に関する意識や、育児分担に関する意識、「親になること」と結婚についての意識などに、アンビバレントな態度が見られた。自分が将来親になるだろうと思いながら、その姿を想像したり、自信を持ったりできないのは、責任感があること、十分な経済力、子どもを育てる力があること、十分な居住環境、社会的な常識を持っていることなど、「親になることの条件」を高く考え「完璧な親」を目指していることが一つの要因である（奥田・他 2010）。また、子どもを「授かりもの」より「つくるもの」として意識する者が多かった。加えて、「授かり」意識低群の方が「親になることの条件」意識が高く、「親になること」を難しいものと捉えている傾向を示した（平岡・他 2010）。つまり、若者の「親になること」の困難さは、自己実現に向けて自己をコントロールしようとする、「完璧な親」として、わが子と不等価な贈与を含め、交換関係を築かなければならないことへの不安が増大することが示唆された。「自律—自己決定」の主体として人生をデザインすることを求められてきた若者において、「親になること」は他者との交換関係だけでなく、不等価な贈与関係の統合が要求されるため、アンビバレントな態度として現れる。親になりたくてもなれない状況は、これまでの友人などを中心とする人間関係が交換関係で築かれており、贈与による他者受容の経験が不足していることと大きく関連すると考えられる。

また、「親とは何か」という問いに対し、「結婚した相手との間に生まれた子どもを育てること」については 9 割以上が「親」であると考える一方で、血縁関係の有無や操作的な生殖による親子関係については、その判断は多様である（奥田・他 2010）。そこには、多様な関係で成立する親子関係に対する揺らぎと、「親」が「子」にとって出自を含め特別な存在であることへのこだわりを読み取ることができる。

つまり、親子における血縁関係にこだわりを持ち、「親」とは単に子どもの育ちを支援する大人という緩やかな関係性では十分ではないと考える若者が多く、金銭的な支援だけでなく「育てる」という行為こそが親を規定すると考えている。現代は、生殖にかかわる科学技術の進歩や家族関係の永続性の変化により親子関係がますます複雑化している。一方で、社会や親族と密接にかかわっていた生き方が、自己のライフデザインとしてイメージされることにより、「育てる」行為は子どもとの相互関係によって意識される以前に、「親」の条件として個人に求められる能力と意識されるのである。

このような「親になること」への意識は、機能や有用性から捉える「もの」的世界として意識化されている。さらに、個人化社会の中では、他者との関係は、主従や依存といったタテの関係ではなく、平等や対等といったヨコの関係で自立した自己であることが重要であるがゆえに、自己と他者との相互浸透的でコントロール不可能な「こと」的世界に身を置く場が不足している（後藤 2011）。よって、「親」としての「他者への責任」を、コントロール可能な「自己実現」と結びつけた「贈与」と意識しやすく、コントロール不可能な他者に委ねられた「贈与」は難しい。言葉による説明では難解になるが、自己実現や充実感と結びつかない子育てでは虐待が起こりやすい状況であることが物語っている。これは親個人の能力不足の問題として語られることが多いが、親子の関係性が「こと」として認識していく場所が家庭に閉じられていることに目を向けなければならない。

したがって、現代における「親になること」の学びは、「もの」的世界と「こと」的世界という視点に焦点を当てる必要が重要になる。これについては、すでに「＜大人になること＞の難しさ」（後藤 2011）で考察を加えているため、ここでは本稿に必要な範囲で説明を加えておこう。単純化すれば、「もの」的世界とは、自己の主観から切り離れた客観的对象として捉えられる世界であり、「こと」的世界とは、自己と一元化した間主観的世界である。さらに、木村は、『自己』とか『自分』とかは、『もの』として『ある』ことはできず、むしろいろいろな物を「もの」として成立させている『場所』としての『こと』において、またそのような『こと』として生きられている根源的な生命的躍動の一側面」だと言う（木村 2008:81）。つまり、われわれが生きるうえで他者とのアクチュアルは関係が不可欠であることと同様に、「親になること」は「こと」として認識されてはじめて「もの」としての意味が生まれるのである。「親になること」を世界に関わっていく能動的行為という立場からとらえ、「自己」を「こと」の一部として「ある」と理解することによってのみ、「私が生きている」と感じるができる。それと同じ次元ではじめて「他者への責任」を感じることができるのである。

よって、本研究では、調査及び文献研究の検討から、「親になること」を単に「自分の子ども」を育てるという狭義ではなく、「他者」とともに成長する営みという広義に捉えることで、「世話をする一される（ケア）」という行為に内包される養育役割に加えて、個人化の浸透する機能性指向社会だからこそ求められる「他者との関係性への了解」を学ぶ行為としての意義を明らかにした（後藤・他 2010）。つまり、「親になること」という他者との

親密な関係の認識から、「自己責任」や「自己実現」という個人によるライフデザインの限界と「他者への責任」を捉え直すことが次世代教育プログラムに求められることである。

そこで、本稿での目的は、若者を対象として、映画に描き出されている「親になること」の考察を通して、自己の「親になること」にまつわる意識の変容を明らかにするとともに、次世代プログラムのひとつとして、映画の考察を通して「親になること」を学ぶことの意義を検討することである。映画の視聴および考察というプログラムは、本学学生 2~4 年生 46 名（男 16, 女 30）対し 2011 年 11 月~1 月（1 回 90 分, 全 6 回）に行ったものである。資料として用いた文章は、特定の学生に見られた特徴的な学びというより、プログラムによる多様な意見からの検討を目的とするため、すべて異なる学生の文章を用いた。

1 映画のあらすじと選定理由

(1) 『アイ・アム・サム』のあらすじと選定理由

あらすじは以下のようである。7 歳児程度の知能しかもっていないサムは、行きずりの女性との間にできた子どもルーシーを一人で育てることになった。育児について何も知識のなかったサムは、隣人のアニーに助けてもらいながら、二人で生活を続けていた。しかし、あることをきっかけに、サムの養育能力に問題があることがソーシャル・ワーカーに伝わる。知能が低いこと、経済力がないことを理由に、ルーシーは児童養護施設への入所を経て里親ランディ夫妻に引き取られることになる。その間、サムはルーシーとの生活を取り戻すために弁護士のリタに弁護を依頼するとともに、経済力を得ようと努力する。サムはルーシーに勉強を教えることはできなかったが、ルーシーと一緒にいることを心から楽しみ、ルーシーが喜ぶことを第一に考えていた。一方、弁護士のリタは論理的で経済力があり、裁判所が親の条件として判断した能力は十分であったが、夫婦関係、親子関係はうまくいっていない。サムの人とのかかわり方から、リタは自己肯定感を取り戻すとともに、子どもとのかかわりを理解して、サムがルーシーの親でいられるように心から弁護する。また、里親のランディはルーシーのためにかわいらしくしつらえた部屋を用意し、ルーシーの望む習い事をたくさんさせ、よい教育を行うことで、ルーシーの望む親になろうとする。しかし、ルーシーは夜抜け出しては近所に引っ越してきたサムのところへ出かけていく。ランディやリタは 2 人の関係の深さに気づき、二人と一緒に生活しながらルーシーが成長できるように支援することが最善であると判断して、サムの友人たちも含めた多様な人との交流を続けながら、二人を支援する。

この映画は主人公のサムが障がい者であるために、「親になること」を考える事例としては特殊すぎると考えるのが一般的であろう。しかし、サムが経済力や子どもの教育力の不足を理由に親としての資格不適合者と社会から判断され、里親のランディが十分な教育環境を親として整えていると判断される設定は、若者たちが親になるための条件として考えている問題を浮き彫りにする。また、社会的に十分な資格を持つと考えられるリタが我が子と関係がうまくいかず自信を失う設定は、仕事を続けながら自己実現をめざす生活の中

で、子どもとどう向き合う必要があるのか、仕事と子育ての両立という視点とは異なる側面から「親になること」の問題を提起していると考えられる。これら二つの理由から、個人化社会の中で進行している「自己実現」というライフデザインと「他者への責任」、および「もの」的世界と「こと」的世界の親子関係について考える教材として適していると判断した。

（２）『私は２歳』のあらすじと選定理由

この映画の原作は、小児科医である松田道雄の育児書『私は二歳』である。主人公太郎の成長だけでなく、親や祖母の変化も描いている。ナレーションは赤ん坊の設定で、「僕」（太郎）の気持ちや状況を話している。このナレーションによって、親と子どもは別的人格であるからこそ、はじめは親が子どものことをうまく理解できていないことがユーモラスに明らかにされる。映画では、「僕」が０歳から２歳になるまでの成長を追うことで、親であっても、行動の意味を読み解けるようになるには時間が必要であり、生活をする中で子どもだけでなく、親もまた変化していく姿が描かれている。

この映画を教材として選んだ理由は、子どもの成長がわかりやすく描かれているだけでなく、それとともに親も変化していくことがユーモラスに、あたたかな視線で捉えられていることである。高度経済成長期という現代とは異なる社会背景の中の子育てであるが、親はいつでも子どもの健やかな成長を願い、だからこそ心配しすぎて子どもの行動に余計な手を出してしまうこと、親は初めから適切な態度が身についているわけではなく、子どもの成長とともに変化していくこと、父親が仕事中心の生活を送りつつも、子育てに巻き込まれていくことなどが描かれており、他者としての子ども、子育てによる親の変容について考えることができる。自分が育てられた経験以外に、身近にその日常を目にする機会の少ない若者にとっては、リアリティを感じながら子育ての大変さを理解できる。その大変さを乗り越えられるのは、「もの」としての親の能力ではなく、「こと」としての時間と空間の共有であること、「もの」としての「親」は、「こと」のなかで意味を付与されることを理解できる教材であると判断した。

あらすじは以下のようなものである。団地に住むサラリーマン夫婦の間に赤ん坊が生まれた。母親は子育てがはじめてなうえに、団地という閉鎖的な住まいに悪戦苦闘する。はじめは子育てに非協力的だった父親も、子どものわんぱくな行動で、玄関に柵を作らされたり、夜泣きの相手をさせられたり、次第に子育てに巻き込まれていく。母親も子どもがいることで、近隣に住む母親仲間に外遊びの面倒を見てもらったり、はしかをうつしたかもしれないと互いに連絡をするなど、母子カプセルといわれる現代の子育てよりも自然な関係の広がりが描き出される。夫の母親と同居することになり、育児の方針で意見がくいちがい、ぎくしゃくする場面もある。しかし、それぞれが、太郎のよりよい成長を願って、どんな育て方をすればいいか、考え方や関係性が変化していく。

2 映画を通して意識された「親になること」

(1) 『アイ・アム・サム』から考える「親になること」

ここでは、映画視聴後に配布したプリントの記述を資料として用いる。映画は2回に分けて視聴し、2回目の視聴後と3回目のはじめに時間を設けて記入してもらった。記入後、受講生で意見交換を行ったが、ここで引用した内容は、意見交換前に記述したものである。引用文は「子どもがよりよく育つために必要な親になることとはどんなことか」という質問に対しての記述である。なお、その質問の前にサム、リタ、ランディそれぞれの「親」についても記述してもらっており、必要に応じて筆者の考察部分に引用している。

この映画の選定理由で述べたように、この映画では3パターンの「親」が出てくる。この映画の出てくる「親」と「子」の関係を通して「親になること」を考えることは、おのずと自分が抱いてきた「親になること」への問い直しにつながる。

A (女) : 私たちが誰しも考えていたものは、「子どもの手本になる」とか「常識がある」だとか、「経済力がある」とかだと思っていた。でも、サムは全てが完璧でないにもかかわらず、周りの人、そして見ている私たちも「親」だと認めていた。親として大切なことは、自分よりも子どもを第一に考えられるかどうかだと思う。それは、甘やかすことも厳しくすることも必要で、その子の将来を見込んで、大人になった時のことを考えて、大切にしていくこと。それができる人は親になる覚悟があるのではないかと思う。

B (男) : 仕事の関係で、なかなか子どもと過ごす時間を設けることのできない人もいます。しかし、その限られた時間の中で、親と子がどのように優良なコミュニケーションを築けるかが問題になってきます。そのためには、自分の子どもが親に対して何を求めているのかをよく考える必要があると思う。

Aは、サムについて、サム自身は「家族として一緒にいたい」が、「ルーシーの負担になりたくないという気持ち」を強く持ち、「ともに喜び悲しみ、『それはだめだよ』と言えるところ」を「親になっている」と評価し、「子どものことを第一に考えられるかどうか」だと考えている。また、Bは「車の中に子どもを置き去りにして死なせてしまうような、自分優先の親が多い現代で、サムは適性があるのではないかと皆から思われた」と評価し、子どもが親に何を求めているか、その関係性が重要であると述べている。このような関係性を「親であること」だと指摘する学生が多い。つまり、「もの」的世界での「親」では不完全であるサムが、「こと」的世界ではどの大人よりも子どもと相互関係を築けていることが「親」であると認められた理由だと考えている。

C (女) : サムがルーシーを思う気持ちは、他の人たちには理解できなかったが、だんだん

二人に関わっていくうちに、二人がお互いのことを大切にかげがえのないものなんだと思っているということを理解したのだと思いました。今の時代、子どもを生んでも大切に育てないで捨ててしまう人もいます。社会的、物理的に考えれば子どもができたら親だと考えると思います。でもそれが基準でいいのだろうか、ふと思いました。自覚の問題だと思いますが、やはり親になることは大変なことなんだと感じました。

一方で、Cのように、「親になること」を真剣に考えれば考えるほど、より一層大変に感じた学生もいる。「自覚の問題」とは、子どものことを「かけがえのない」存在として大切に思うことであり、自分が親として「他者への責任」を持つということであろう。多くの学生は、これまでの経験で、世話をされる立場のままでいることが多く、世話をする立場に身を置く機会はその多くはない。自分ではなく他者である子どもの立場を優先させ、どんなことがあってもお互いに「かけがえのない」存在であり続けることは、「こと」的世界を「もの」的世界に引き寄せて考えれば、より難しく感じるのであろう。

リタもアンディも親としての自覚はあった。それでも、「こと」的世界での関係を優先させることはサムにしかできなかった。学生たちも、親になるためには子どもを「大切にする」という自覚が必要だと考えていたが、その「大切にする」という意味までは、イメージできていないのである。Bが指摘しているように、無自覚なまま子を生むことで子どもがその犠牲になる現代だからこそ、単に「生む=親」だから「自覚せよ」ではなく、具体的に「自覚の問題」とは何か、学ぶ機会が重要だということでもある。それは単に、親にだけ、さらに負担を負わせるということではなく、親自身の考え方や周りのサポートの在り方を変化させて、「親になること」を通した「場所」の生成を促すための問い直しでもある。

D (女) : 「子を思う気持ち」が重要であると考え。しかし、子どもの気持ちを見殺した一方的な思いはよくない。一方的であると、子どもは親に逆らえず親が喜ぶよう期待に応えようとしてどんどん溝は深まっていくので危険である。なので、「子どもの意思を尊重」し、子どもを思う気持ちが強くなればなるほど、親に近づいていくのだと感じる。家事ができて学歴が良くして仕事もしてお金をたくさん稼いでいても、それだけでは「よい親」とは言えない。優しくてなんでも与えてくれたとしても、よい親とは言えない。子どもがよりよく育つためには、親自身が自分たちのことを理解し、子どもを理解し、子を強く思う気持ちが重要になってくる。相互にサポートしながら、支えあいながら考えることが、「親になること」に必要なのである。

E (女) : サムは親であるという自覚を持ち、ルーシーのためになると考えたことを実行していた。ランディをルーシーの「母親」だと言ったこともそう。常にルーシーを

中心に生活していた。このようにできる人は少ない。だから、皆サムを「親」とあると認めた。考えればいろいろあるが、一番なのはやはり「子どもとともに生きること」である。生んだだけでは「生みの親」、稼いでくるのは「配偶者」ではない。親としての自覚を持ち、子どもとともに生きていることで、初めて「親」になれるのである。

D はアンディの態度について、ルーシーが「傷つかない」ように、そして「不自由さ」や「みじめさ」を感じないように、かわいい洋服を着せたり、かわいらしくしつらえた子ども部屋を用意したり、子どもの能力を伸ばすために、いろいろな習い事をさせたりすることが「大切にすること」だったが、それは親が考える「大切にすること」であって、ルーシーが最も望むことではなかったと指摘している。もちろん、ルーシーは自分を思ってくれるアンディーを大切に思っており、E が指摘しているように、そのことに気づいているサムは、自分だけが「親」だと主張するのではなく、アンディに母親の役目を一緒に担ってほしいと依頼する。

D の「親自身が自分たちのことを理解し」とは、このように完璧でない部分を認識したり、ともすれば自分がしていることが実は自己満足や自分の癒しのためかもしれないと、子どもの応答から自答したりする必要性を示している。また E はリタが「子どもが自分と遊びたいと思っていない」「子どもに嫌われている」と「勘違い」し、「親」としてだめだと悩んでいたと指摘している。「親になること」とは、子どもを理解することと一方向に考えがちだが、実は子どもという他者の応答を通して「自己」を知ることでもある。

以下に取り上げる F～I の「親になること」には、親が「育てる」という一方向のプロセスではなく、成長しあうという双方向の関係だと述べられている。つまり、「親になること」は、すでに親になる資格を持った大人が子どもを「育てる」というタテの関係ではなく、子のよりよい成長を願い、環境を整えて子どもの育ちを支援することを通して、自らも変容していくという、時空間を通した関係である。したがって、「親になること」に求められることは、親としてふさわしい個人の能力や条件ではなく、自分と向き合い、子どもと関わりあう「親になっていくプロセス」そのものであり、自分ではコントロールできない世界に自己を開くということである。

F (男)：親は子どもを育てるだけの役割ではなく、相互に成長したり刺激しあったりしていくことにある。

G (女)：どれだけ子どものことを思うかだと感じる。誰だって親になってもできないことはたくさんある。だが、それをたくさんの人が関わって補うことが大切なことだと思う。子どもから学ぶということが素直にできる人が大切だなと思う。

H (男) : 人として自分に自信が持てる親であることが必要だと思う。親自身が持っている能力ではなく、子どもの持つ個性をその環境で育っていく支援ができること。

I (男) : まずは安全基地になること。小さいころはなるべく多く接する。そして安心感を与える。子どものニーズを満たしていくこと。ただ、子どものニーズを満たすためにわがままにさせてはいけない。何かするときは影響のある相手のことを考えたりすることを大切にすることを教える。子どものニーズを満たすにしろ、社会規範を教えるにしろ、まず重要なことは自分を知ること。自分を知ることによって、自分ができないことを他の人に頼むことができる。そういったことを頼める環境や、変にプライドを持たずに他の人をお願いできる相手を信頼する気持ちが必要である。最終的には、子どもを思う気持ちと子どものために一生懸命行動する姿勢があれば、子は親の背中を見てよりよく育っていくだろう。

I の言う「相手を信頼する」ことは、個人化する社会においてリスクとなる行為とされる。不完全な自己を自覚しても、こちらの期待通りのサービスを提供してもらえないか不透明な場合は、とりあえずサービス提供の依頼を避けるのが一般的である。そのため現代では、親としての不完全さを補うために、幼稚園や保育園、しつけ教室など養育を専門とする場所に預け、養育の素人である親ではなく、専門家によって完璧な子どもに育ててもらおうと考える人もいる。しかし、リスクとは「もの」的世界による関係によって成立している。「こと」的世界では、リスクとなりうる未決定性が自己変容への契機であり、支援者と関係を築くことは自己を開くことに他ならない。

自己を「閉じる」ことで傷つかないように防御してきた若者にとって、「開く」ことは異物としての他者が自己の世界に入ってくることであるから、非常に困難なことである。それをおのずとさせる存在が子どもである。子どもは親に自己が世界に開いていることを知らしめるからこそ、親は「開いている」ことをおのずと認識できるのである。

映画では、リタやアンディという関係があったからこそ、サムとルーシーの「開いた」関係がよりわかりやすい形となって理解された。「こと」的世界は自己と一元化しているため、あたりまえすぎて認識しにくい。リタやアンディが示した「もの」的な行為が前景となり、背景となる「こと」的なサムの行為が一つの意味方向を持って理解されたのである。

(2) 『私は2歳』から考える「親になること」

『私は2歳』の舞台は、日本の高度経済成長期で社会状況は異なるが、登場する太郎の両親は、親子の関係性に着目すれば、『アイ・アム・サム』に出てきた3パターンの親の姿を一人の内に持ったごく一般的な親である。『アイ・アム・サム』で「親になること」を考えた学生たちにとって、サムのようにふるまえない親に対して「親になりきれしていない」と、その印象は厳しい。それは、サムのようにふるまうことがリアリティをもって理解し

たとしても、アクチュアルに捉えられていないからこそその指摘ともいえる。

育児書などの知識をたとえ知っていても、実際に子ども理解に役立て、うまく応えるためには、関係を育む「時」が大切である。知識不足は「もの」的世界で親を未熟に見せる。なぜなら、「こと」の中で生まれる意味と育児書の知識が重なり合って初めて「もの」としての本来の意味を持つからである。だから、親の成長を感じさせるのは、親の知識が身についていくという「もの」的变化ではなく、関係性のなかで変容していく「こと」的世界での変化なのである。言葉で伝えることに慣れてしまっている親にとっては、言葉が生まれる以前の太郎の世界を理解することが難しいが、徐々にそれを理解していく。それをうまく表現したのが、「太郎の声」によるナレーションである。

J (女) : 『私は2歳』に出てくる親は、親になりきれていないと感じた。子どもが産まれたからといって親になれるわけではないし、育てているだけでも、心配しすぎるだけでも、一人でも親になれるわけではないと考える。親になるということは、自分の価値観を押しつけることでも、子どもを育てるということでもなく、いかに子どもを愛し、家族を大切にし、自分のことも大切にすることであると考え。一方的な愛ではなく、お互いが必要だと思える愛なのだ。「育児はこういうもの」と固定観念が強すぎると、適応できずにストレスがたまっていき、思い描いた家族とは違うものになってしまうと感じた。子どもだけでなく、家族自体を考えることで、子どもだけでなく、親も良い方向に成長していくのだと感じた。

K (男) : 心の声 (著者注 : 太郎の気持ちを代弁したナレーション) を聞くと、より強く親になることの大きさ、大変さがわかる。愛情は注いでいるように見えるが、義務感というのが強い。子どもの知識が浅い。子どもという存在を軽く見ていて、周りのことに目を向けられていないことがある。子どもよりも自分自身が好きだ。

L (女) : 今回、この映画を見て親の視点や考え方と子どもの視点や考え方は全く違っていることがわかりました。映画では、子どもの声が聞こえるため、子ども自身が何をしてほしいのか、何を思っているのかを直接知ることができました。しかし、これは映画なので実際に子どもの声をきくことはできません。そのため、子どもの欲求に親はなかなか答えることができないのです。子どもは欲求が満たされないため泣き、親は子どもの欲求がわからずいらついてしまう。それが夫婦喧嘩になってしまうのだ。でも、子どもができたことにより、初めのうちはわからないことが多くても、次第に子どもの欲求が何なのかわかるようになってくる。子どもだけが成長するのではなく、親自身も夫婦として、親子として成長していくのです。

この映画では、子どもが0歳から2歳までの期間を題材としているため、「親」が常に子どもの様子から要求していることを読み解かなければならず、それがなかなか難しい。日常の出来事を丁寧に描いており、『アイ・アム・サム』では描かれなかった子育ての苦労やそれにまつわる家族間に生じる問題を良く理解できる。子どもの成長にはじめは関心がありなかった父親も、子どもの成長を「もの」の変化ではなく、間主観的な「こと」的世界で意識できるようになるに従い、子どものことを自然に優先して考えられるようになる。それは太郎のことが我がことのように感じられるようになったからである。Mはその変化を的確にとらえている。

M (女)：「親になる」といっても、子どもが生まれたから「はい、親になりました」となるわけではない。はじめは何をやってもうまくいかず、失敗ばかり。ちょっとしたことで心配になり、気の休まる日がない。しかし、子どもが成長する毎に、少しずつ「ああ、こうしていけばいいのか」とわかるようになる。一つ理解しても、わからない部分が新たに出てきてしまうのだが。それでいいのだ。
「親」は「なる」ものではなく、「なっていく」からである。片時も目を離せない。だからこそ、昨日までできなかったことができるようになったのを見ることができる喜びがあるのだ。親が子どもを育てるように、子も親を育てるのである。

親子は他の人との関係よりも親密で特別な関係である、間主観的世界として一元化することは自然におこりうることである。一方で、他の人との親密性は別であるから、どのように考えればいいのか、他の人からの協力はどこまで求めていいのか、Nがとても苦心していること読み取れる。映画の中では、母親同士、「おたがいさま」という開かれた関係が描かれていたし、嫁姑の関係が太郎の成長を通して変化していく「こと」的世界も描かれていた。しかし、映画での学びは、「こと」的世界を「もの」的世界で理解していることであるから、自己の身に置き換えて、自己の世界が他者に関いていることに気づくことは難しいことである。映画視聴だけの学びの限界を示しているともいえる。

若者にとって、すでに自己が世界に関いていることを身近に感じる出来事は、ライブなどで会場が一体となった時の感覚であろう。知らない人と一時の一体感を楽しむことはあっても、特定の人に楽しみだけでなく苦しみもまじりあって、その人と自分が「ある」とことはとても難しい。「もの」を交換するかのような関係の認識に、緊張感がよく表れている。

「もの」から「こと」へ、その理解を深化させるのは、映画視聴後の意見交換という「こと」としての時間かもしれない。今回は、そのような時間を取ることができなかったが、講義の最後に、学生から要望として意見交換を望む声が多数あがった理由もそこにあるのかもしれない。

N (男)：親になるということは、覚悟、責任を持つことはもちろん、自分のことよりも子

どものために何かを我慢し、子どもの成長を見守り、子どものことを優先することだと感じました。

自分のやりたいことを、今すぐやらなくてはならないわけではないから、それを少し先延ばしにする、という時間の犠牲やその覚悟を持つということが、親になるということの第一歩なのではないでしょうか。それと同時に、他者に迷惑をかけない、他者を不快にさせない、ということも忘れず、周りに気を配れること、自分の子育てのために他者を犠牲にしないということも、親として必要な覚悟だと思います。とはいえ、誰にも迷惑をかけずに、子育てをやり遂げることは不可能だと思います。他者に迷惑をかけない、他者を不快にさせないという気遣いは忘れず、どうしても仕方なく、やむを得ずになってしまうことを除き、必要以上に、つまり自分の代わりに他者に迷惑をかけない、他者を犠牲にしないということが、大切なのだと思います。

3 「親になること」にまつわる意識の変容

ここまで、多くの学生が、映画の視聴を通して、「親になること」は「子どもとともに生きること」であり、「自分を知ること」で「親になっていくプロセス」だと考えたことを考察してきた。これらの学びは、同時に、学びを通して「親になること」にまつわる「親」や「子」、「家族」に対する意識の変容をもたらしている。以下の文章は、二つの映画視聴についての短い意見交換後に、授業のまとめとして『親』『子ども』『家族』『親になること』は変化したか」という問いに対しての回答である。

まず、Oが授業による変化を明確に表現しているので取り上げておく。「親になること」がライフイベントの選択肢ではなく、「親」という位置づけから他者や社会と関わるプロセスだと捉えている。これは、「親になること」が「他者との関係性への了解」を学ぶ行為として理解されていることを示している。

O (男) :

	＜授業を受ける前＞		＜授業を受けた後＞
「親」	・ 子どもを成長させるために物事を教える	→	・ 子どもとともに成長していく
	・ 血がつながっている (物理的に産んだ)	→	・ 子どもを愛し、相互に「親だ」「子」だと思っている
「子」	・ 親をみて成長する	→	・ 親に影響を受けることが多いのは事実だが、親だけではなく子を取りまく全ての影響を受けて成長する

「家族」	・ 血がつながっている	→	・ 「この人といたい」「過ごしていきたい」と永続的に思える関係
「親になること」	・ 子どもをうんだ	→	・ 親を通じて社会に関わってきた「子どもの自分」から成長して、己から社会や他者に関わっていくこと

P は、近隣の人が訪ねてこない日はないというほど、地域での交流が残る場所で育ってきた。しかし、このプログラムの中では、常に「親」が責任をもって「子ども」を育てることができないのであれば、「親」になるべきではないと主張してきた。一生懸命に真面目に自分の人生を生きようとすればするほど、「自己責任」や「自己選択」といった社会の価値観に翻弄されてしまうのである。P は「親になること」を学ぶことによって、個人化する社会の影響を相対化し、個人の能力を身につけることに偏ることなく、ともに成長し変容していけばよいことに気づき、他者との関係性から「親」や「子」を捉えるように変化している。

P (女)：私はこの授業を受講する前までは、親や大人はなんでも自分でできて、何でも一人で解決できるパーフェクトな存在でなければならないと思っていました。教職課程の勉強でも、個性の尊重、個人の能力という単語をキーワードにしてきたので、個人という考えにだいぶ偏っていた気がします。しかし、この授業を受けるたびに、「そんなに個にこだわる必要はないかもしれない」という考えが生まれていきました。教育現場でも社会においても個人の能力が問われ、個人社会が進行している今日、私はすっかりその色に染まってしまっていたのかもしれない。一人でできない人なんて甘ったれだと思ったこともあります。しかし、親も子どもも、皆同じ人間で、人間は他者の支援や関わりがなければ生きていくことができないのだということを、この授業を受講して思い出しました。家族とはただの血縁集団ではなく、無条件で大切にしたいと思えるような関係にある人のこと。親になることは、子どもや周囲と一緒に自分も成長または生成すること。私は家族や親をこのように定義するようになりました。これからは、もっと穏やかな感覚で家族という存在、親や子ども、親になることの意味を捉えていこうと思います。助け合いながら生きるのは、とても普通のことなのですから。

授業の中では、なるべく愛情という表現を避けてきた。なぜならば、すべての意味がその一言に含まれてしまい、関係性を明確に捉えられないと考えてきたからである。Q はその「愛情」と向き合っている。これは、女性には母性がある、子が生まれれば、親は子に

愛情があつて当たり前としてきた社会の言説に対して、見事に疑問を投げかけている。

現代は、子どもを愛することができずに苦しむ親が多い。仕事を持っている母親の方が子どもとの関係が良好であるのも、子どもを育てることが自己存在のすべてにならなくてすむからである。愛情とは無償の贈与という言葉でいいかえることができるかもしれない。

すなわち、見返りを期待せずに、相手に気づかれないうちに求められることを差し出すことである。不自由なく自己の人生を生きることが当たり前であった人が、子どもが生まれたからと言って突然、他者が求める以前に求められるものを差し出すことなどできない。それができるようになるのは、Q が言うように日々の生活の中で、必要に応じて「こと」としての関係が深まるゆえである。例えば、ルーシーが眠れないときに何をしてあげればよいか、サムは自然にできて、アンディに難しかったのは、愛情の深さではなく、ルーシーが赤ん坊の時からともに過ごしてきた結果であつて、その行為も一つしか正解がないわけではない。

Q にとって、この映画を通して「親になること」を学ぶことは、まさに「他者との関係性の了解」であつたといえるであろう。

Q (女)：私は今まで親や家族を考えるうえで、愛情という目に見えない感情の部分に重点を置いて考えていた。愛情がなければ親ではないとか、親子にとって血縁より愛情の有無が大切なのではないかと、とらえていた。しかし、家族にとって重要なものは、親と子の関係性なのではないかと思うようになった。

子どもにとって親は依存しなければ生きていけない存在である。また、親にとって子は新たななかかわりや共同体とのつながりを増やしてくれる存在である。このように、親と子がお互いの生活の一部をともに作りあげ、ともに支援しあつて生きていくことで、親と子の中に絆が生まれる。親子の愛情は、こういった関係の中で自然にはぐくまれていくものだと思う。つまり、愛情について考えるよりも前に、親と子がいかに生活をともに作りあげていくか、そのプロセスや関係性がとても重要になってくるものだと思う。血縁関係は、その関係性をかたちづくる上で、あつた方がよりスムーズにできると思うが、決してないからといって生活をともに作りあげたり、責任の一部を担ったりできないということではない。

おわりに

本稿では、青年期を対象とした次世代教育プログラムの一つとして、映画を教材とする学びについて検討した。まだ親になっていない若者に対して、「親になること」を考えることは、非常に距離のある問題である。また、学生という立場であることも関係して、「親」という存在を、ケアされる立場からは認識できるが、ケアする側と対等な立場からは認識しにくい。そのような中で、ここで取り上げた映画はそれぞれ「親になること」と向き合うために適した教材であつたと言えよう。

その要因としては、まず、教材という位置づけを超えて、映画そのものが作品として優れており、見るものが映画の世界に生きることで、「親になること」を体験できたことである。映画のストーリーではなく、親の変容のプロセスを「親として」楽しんでいた。二つ目は、「親になる」というプロセスを相対化できる内容であったことである。自分の親子関係は、自己と一元化しているため、育てることの苦労話や思い出を聞いたとしても、それを相対化することは難しい。映画の中で親として生きることができる作品だからこそ、作品を俯瞰した時、そのプロセスを相対化できるのである。また、いのちの誕生という生命のもつ神秘にあえて触れていないことが、「親になること」のプロセスへ目を向けるためには有効であった。

一方で、ここで問題としている「こと」的世界は、あくまでも「こと」を物象化して、「もの」的世界で理解している。よって、このプログラムは、意識の前景としてある「もの」に先立って、地としての「こと」があるということへ、気づきを促すことが可能であり、その認識の変化が「もの」的世界の価値変容を促す可能性があるということである。したがって、この学びが、どこまでリアリティではなくアクチュアリティとして「こと」的世界の認識の変化を引き起こすかは、また別の問題であることもこのプログラムの限界として明記しておく。

そのうえで、青年期における次世代教育プログラムを「親になること」=「他者との関係性の了解」として、学びを深めることの有効性は、本稿の考察から、次の3点にまとめられる。

第1に、「親」や「子ども」が閉じて独立して存在するのではなく、相互関係であるという気づきである。これにより、「親になること」が自己の能力として求められるものでないこと、親も他者である子どもとともに変容すればいいこと、子どもは単に世話をされる存在ではなく、親を開かせる存在であることという新たな視点が学生の中に生まれている。

第2に、「親になること」が自己と対峙することに他ならないという気づきである。「親になること」は単に一つの「親になるか、ならないか」というライフイベントの選択肢ではなく、ケアするという多様な「親」の在り方を通して、自己を生きるために他者と関わる重要なプロセスとすることで、「親になること」の位置づけの変化を可能にしている。

第3に、「親になること」が個人に閉じた問題ではないことを、「こと」的世界を通して気づくことにより、ワークライフバランスの問題や子育て支援への新たな視点を提供する可能性があることである。男女共同参画社会や少子化対策として、これまでも子育て支援は重要なテーマとされてきたが、合計特殊出生率には大きな変化が見られていない。親として利用する側や支援する側の両者に意識の変容をもたらすことで、より開かれた関係性による新たな展開が生まれる視点が含まれている。

本稿の映画による学びは、あくまでも次世代教育プログラムの一部である。今後、他のプログラムについても検討を行う必要がある。

文献

- 奥田雄一郎，後藤さゆり，呉宣児，大森昭生，平岡さつき，前田由美子『『親になること』の今日的意義の再検討と青年期のための次世代教育プログラムの開発：経過報告』共愛学園前橋国際大学論集 10 号，175－185（2010）
- 木村敏『自分ということ』ちくま学芸文庫（2008）
- 後藤さゆり「第 5 章 ＜大人になること＞の難しさ」高橋勝編著『子ども・若者の自己形成空間—教育人間学の視線から—』東信堂，194 - 229（2011）
- 後藤さゆり，平岡さつき，呉宣児，大森昭生，奥田雄一郎，前田由美子「青年期における『親になること』を学ぶ今日的意義の検討」共愛学園前橋国際大学論集 10 号，207－218（2010）
- 平岡さつき，後藤さゆり，呉宣児，大森昭生，奥田雄一郎，前田由美子「産育意識の変遷と『親になること』に関する一考察」共愛学園前橋国際大学論集 10 号，243－254（2010）

資料

- 『アイ・アム・サム (I am Sam)』，ジェシー・ネルソン監督，2001 年（DVD，松竹，2002 年）.
- 『私は 2 歳』市川崑監督，1962 年（DVD，角川ヘラルド映画，2007 年）

付録

本研究は平成 20 年度科学研究費挑戦的萌芽研究（課題番号 21653086）：「『親になること』の今日的意義の再検討と青年期のための次世代教育プログラムの開発」（研究代表者：後藤さゆり）の助成を受けている．